異世界の淫夢

「ん んん―っ？！(ゴクッ)」
「放しなさい！
こんなことをしてただでは済まないわよ！」
「フェトランの媚薬 その原液だ
強烈だぜ こいつは
処女でも腰を振って
ヨガりまくるってな くくっ」
「お―怖い怖い
怖いから装備や下着まで
全部ひん剥かせてもらったが…
美味そうなカラダしてやがるぜ」
「くっ 放してっ！」
「 悪いなお嬢さん 俺たちの諜報活動には
どうしても内部協力者が必要でね
これから少々 手荒なことをさせてもらうが
まぁなんだ…仲良くしようや くくく 」

「さっきまでの威勢はどうした　お嬢さん
へへっ乳房が熱を帯びてるぞ」
「っ！だ　だめっ触らないで！
んっあぁ…そんな…うそ…」
「カラダはそうは言ってないがなぁ」
「あぁあっ！」
「下の口からも蜜をたらして
物欲しそうにしているぞ
くくっ　淫乱な女だ
媚薬などいらなかったかもな」
「…っあ…そんなこと…ないっ」

「くくく　ほんと淫乱な雌豚だ
ほらっお望みの肉棒だっ！（ズブズブッ）」
「あぁ…だめ　我慢…出来ないっ」
「あああ一っ！（ビクッ）」
「どうした　そんなに腰を振って
入れて欲しいのかい？」
「なんだ　お嬢さん
入れただけでイったのか？」
「…うぅ…はぃ…
お　お願いです…
はやく…お願い」
「あっあっ（ビクン）…ひ　久振りだから…うぅ」

「ですね　分隊長
この娘　底無しですか　自分はもう種切れです」
「だ　だめ…もっと…欲しい」
「「出すぞ！」」
「はい♪」
「あっあっきもち…いい
素敵ですおじ様…つぁ」
「くくっ随分と染まったな
薬の効果もあるが
素養の問題が大きいか」
「はははっ　だとよ　もっと気合入れろ
このお嬢さんは今日から俺たちの愛人だ
情報を貰う分しっかりと種を貢げ」
「ふふふ　そうですよ
一杯気持ちよくしてくださいね
あっ　お尻…」
「へへっこっちの穴は初物だったが
随分ほぐれてきたな」
「…お尻が気持ちいいなんて…
恥ずかしい…けど…あっ」

「あっ　ごめんなさい
気がつかなかったわ」

「…え？　えっ？？　なにこれ？」

「ふふふ 今おじ様たちと
気持ちいいことしてるの
貴女も一緒にって頼んで
連れてきてもらったの」

「…わからないよ…
なに…これ‥え？」

「いいの　深く考えないで
一緒に気持ちいいことしましょ？」

「あっいぃ…あぁ」

「…え？」

「あっ　ま　また
イキそう…」

「おら　お嬢
連れが来たぞ。」

「……(呆然)」

「(ガチャ) おまたせっ！」

「どうしたの？
こんなところに呼び出して」

「ん？ 何この臭い…」

「私ねおじ様たちに一杯気持ちよくされて
普段の嫌な事全部忘れちゃった」
「やめてっ　触らないでっ!
お　お父さん助けてっ…」
「こ　こら騒ぐな　ったく　お仕置きだ
下のお口に薬を飲ませてやるよ」
「嫌な事…」
「え? や　やだ…なにそれ…ひゃ冷たいっ!
へ　変なもの塗らないでっ
というか触らないでってっ!」
「へへっ　じきに自分から触ってくれって言うようになるさ
そっちのお嬢さんのようにな」
「貴女もそうなるといいね
あっそうだ　お尻…気持ちいいよ♪」

「うむ　やはりエルフの方が薬の効き目は薄いか」
「ああ　まぁあっちのお嬢さんは特別だと思うが…
さて　俺は少し休憩してくるよ」
「あ　だめっ抜いちゃ…だめ…
その…もっと…欲しい…」
「…くくくっ　駄目だそうだぞ」
「はぁ　こっちのお嬢ちゃんもいろいろ溜まってそうだな
いいぜ　俺が忘れさせてやるよ」
「んっ(ゴクッ)んん…(ゴクッ)」
「くくく 俺のミルクは美味いか?
エルフのお嬢ちゃん」
「ん…あぁ　やだ…おなかが…熱い…」

「んじゃまぁ二人とも
よろしく頼むぜっ！」
「あっお尻…だめぇ…苦しいの」
「ふふふ　私も最初はそうだったけど
すぐに気持ちよくなったわよ
大丈夫　優しくするから…ね？」
「あっあぁ！　はいって…くるっ」
「「はいぃっ！」」
「ふふふ　可愛い…
あっ…あぁ　きもちいぃ」
「あぁぁぁ一っだめっあああっ！」

「きゃっ!
これは夢?
それとも魔法攻撃? 」
「ダメ魔法が発動しない…本当に夢?
だ　誰か!」
「夢ならなぜ醒めない…」
「「……」」
『…この展開
薄い本で見た」
「んっ誰?(ゴシゴシ)」

「んんん――っ！（ゴクッ）」
「い　痛いっ
陰茎を膣内への挿入…だめっ夢でもダメっ
初めてはあの人に…つぅ…あぁっ」
「「……」」
「はぐっじゅる…ん…んん」
「大きすぎる…
壊れ…る…」
「フェラチオ？ 確かこう…ジュル…
だめ上手くできない」
「あぁぁぁっ！」

「携帯で動画撮影…ダメ…やめてこんな姿あぁっとら…ない…でん…あぁ」
「あぁぁっ硬くて太いのが…子宮に当たって…んあぁ」
「撮らないでぇぇっ！」
「あぁぁ…こんな…夢…早く…あぁ」

「夢は深層心理に眠る欲望を具現化しやすい…
これは…あぁぁっ！ 私が望んだ…？ 」
「あぁ　ちがうぅ…と思う」
「あの貰った…薄い本…禁書指定…絶対　あぁぁぁっ！
お腹の…中…かき回さないで…も　もうだめぇぇ―っ！ 」

『 やめろっ 貴様等 くっ！ 』
「ちっ 暴れるなって
早くしろよ 爺さん」
『 わかっとるわい!
こら じっとせんか ダークエルフのお嬢さん
上手く媚薬が塗れんではないか」
『 び 媚薬だとっ! 貴様等何をするつもりだ!」
『 そりゃお前 夜の森で無防備に夜営している娘を
男だけで狩猟三昧だった俺達が何するかなんて
ナニするに決まってんだろうが 』
「 さよう これは勤勉に狩猟に勤しんだ我々への
神からの恩寵に違いあるまいて」
「ふ ふざけるな――――っ! 」

「はぅ…か 金ならやる 頼む見逃してくれ…
こ この身は緑の人に捧げる供物…たのむ」
「下の口から涎垂らしまくってるくせに
なかなか強情じゃねぇか
さっさと欲情に身を任せちまいなって 楽になるぜ! 」
「あぁぁーっ! 入って…くる…っぁ…いあぁぁーっ! 」

「 腹も減ったじゃろ ほれ
年期の入った爺のミルク たんと飲むがええ」
「んをっ出るっ!(ドピュ)」
「んん(ゴクゴクッ)ぷはっ…ごほごほっ
こんなに飲めるか…」
「へへ 数ヶ月女禁だったからな
まだまだ出るぜっ! 」
「 ふむ ワシとてまだまだ若いもんに負けんわ(ドピュピュ) 」
「へへ きれいな褐色の肌が白く染まったな
すげぇそそるぜ…次は尻の穴に出してやんよ」
「ではワシは子宮に出すかの」
「あぁ…あぁ…カラダが熱い…わたしは…もう…」

「あぁ…（ビグッ）…ああぅ…」
（ドプッブビュビュ）
「おー出てくる出てくる　ってかお前ら出しすぎ」
「オレは七回は出したな」
「ワシは四回じゃ…くぅ老いには勝てんかったかorz」
「…その歳でそんなけ出来れば十分すげぇって…」
「このお嬢ちゃんも乱れまくっとったからのぉ
久々に楽しめたわい」
「あぁぁ…はぁはぁ…」
「「「ではまたな」」」